

かぐや姫はキャラかキャラクターか

木下 聖三

目次

1. 反キャラクターとしてのかぐや姫
2. 可能世界のかぐや姫
3. 反転し続けるかぐや姫
4. 人間の鏡像としてのかぐや姫

1. 反キャラクターとしてのかぐや姫

かぐや姫は日本最古のキャラクターであると同時に、人ならざる人であるという点において、反キャラクター性を有してもいる。この対照は、高畑勲監督の『かぐや姫の物語』（2013年公開）に良く描かれていて、たとえば塚田優が述べているように（「キャラクターを、見ている。」[2014]）、とりわけそのラストシーンにおいて、人間味あふれるキャラクターとしてのかぐや姫と、およそ人間性の損なわれた（単なる絵でしかないような）いわば反キャラクターとしてのかぐや姫とが、交互に表されているのである。

さて、その人間性が損なわれたとしても、つまりかぐや姫が月に帰ったその後も、かぐや姫をかぐや姫たらしめるのは、最終的にはその図像であるというのが、伊藤剛の「キャラ」（Kyara）論であり、最終的には図像はその根拠たりえないというのが、東浩紀の「キャラ」理解であったように思う。

そもそも「キャラ」と「キャラクター」の区別を提唱したのは伊藤の功績とされていて（伊藤『テヅカ・イズ・デッド』[2005]）、しかし、その可能性

を見通そうという段になると、概念規定の統一を見ないのであるが、私の考えでは、実はそうした理解の分裂自体が伊藤のキャラ概念の良いところなのであって、(たとえば「キャラ図像」と「キャラ人格」というように)安易にこの概念の腑分けをしてしまっただけでは(岩下朋世『少女マンガの表現機構』[2013])、せっかくの問題が見失われてしまうように思える。

結論から言うと、私は(可能世界論を念頭に置いた)東の理解が正当だと考えているのだが、伊藤が図像の力を信じるのも、いわばマンガ教の信者としては、これまた正しい立ち居振る舞いであるように思われ、おそらくこれは可能世界の定位をめぐる視差の問題なのである。

2. 可能世界のかぐや姫

伊藤の作業は東のデータベース消費論を陰に陽に引き継いだものと位置付けられているのだが(東伊藤と夏目房之介による鼎談「キャラ／キャラクター概念の可能性」[2007:125-159]中の発言、あるいはよりコンパクトな評論としては、土屋誠一「すぐわかる!キャラクター論の展開」[2016:96-99]など)、こうした批評史上の連続性(同時代性と言ってもいいかもしれない)を重視しすぎると、両者の見立ての違いが見失われ、ひいてはキャラ概念の可能性も損ねてしまいかねない。

そこで注目すべきは、斎藤環の「キャラ」理解である。業界内外の論者ばかりでなく、当人すらそのプライオリティーを主張していないのだが、斎藤は2000年にキャラとキャラクターを区別する議論を展開していた(「日本のキャラ VS 欧米的キャラクター」[2001:115-131])。表情豊かな(ゆえにあまり可愛くない)ディズニーのキャラクターと、圧倒的に無表情な(ゆえに可愛い)サンリオのキャラ。人間の隠喩的な表現と、人間の換喩的な表現(クロード・レヴィ=ストロース流に言うと、ミッキーは「隠喩的人間」、キティちゃんは「換喩的人間」ということになるのか)。

斎藤は後に「キャラクター」というのも転送は可能だけど複製は不可能で、「キャラ」は転送は不可能で複製は可能なんじゃないか」とも述べている

(東／伊藤／夏目「キャラ／キャラクター概念の可能性」[2007：148]。斎藤『キャラクター精神分析』[2011：90-91]にも同趣旨の記述が見られる)。これなど可能世界論を念頭に置いた東の「キャラ」理解を敷衍した文言として読むことができる。

東 …キャラクターとは一回しか人生がない存在のことなんです。それに対して、もっといろんな人生があるかもしれないと想像させる存在が、キャラなんです。そう分けてみればどうでしょう。つまり、キャラクターとキャラの区別の本質は、可能世界の想像力に関係している。

(東／伊藤／夏目「キャラ／キャラクター概念の可能性」[2007：153])

「いろんな人生」を想像することはすなわち複数の可能世界を想像することであり、複数の可能世界間の転送を夢想することであろう。ここで、別の可能世界の主体は果たして元と（全く同じではないにしても）同一の主体と言えるのか。かの主体とこの主体を同一視するならば、その者は貫世界同定を果たしている。かの主体とこの主体をどこまでも区別するならば、その者は複数の可能世界間の転送でなく、複数の可能世界のそれぞれに主体の複製を見る。

貫世界同定を認める者は、いずれの可能世界も現実世界から遡行されるほかなく、つまるところ現実世界しか実在しないと考える、ソール・クリプキ型の現実主義者であり、複数の可能世界のそれぞれに主体の複製を見る者は、複数の可能世界が等しい権利で（つまりある1つの世界だけが「現実である」という特権を有さずに）実在していると考え、デイヴィッド・ルイス型の可能主義者である（三浦俊彦の可能世界論を参照。「規約主義によるクリプキ型現実主義は貫世界同定やこのもの主義を認め、実在論によるルイス型可能主義は分身説に傾く、ということになるでしょう」[1997：106]。ちなみに、三浦はルイス型可能主義の方が簡単で便利と評しており、実際、虚構世界を扱った著書[1995]では、「虚構実在論」を説いている）。とすると、先述の鼎談において（東／伊藤／夏目「キャラ／キャラクター概念の可能性」

[2007])、「図像性にキャラの力の根拠を求めるのはちょっと違う気がする。… [キャラの自律のために] 絵が絶対に必要というわけではない」[2007：137]、「僕は、キャラが立つために必要なのは、同一性の強さではなく、むしろ同一性の徹底した少なさ、どの変化へも対応する許容度の高さだと思います」[2007：155]と述べる東や、「キャラにおいて図像的な同一性はあまり本質ではないと思うんです」[2007：158]と述べる斎藤と、他方で「ただ、…そこ [ライトノベル] での「キャラ」はやっぱり突き詰めると図像の力に担保されていると思うんですよ」[2007：14]と述べる伊藤との対立にも、主体の貫世界同定を認めるか否か、という主体観の対立、ひいては、ルイス型可能主義を採るか、クリプキ型現実主義を採るか、という(可能)世界観の対立を見て取ることができるだろう。

3. 反転し続けるかぐや姫

それはこういうことだ。東や斎藤のキャラ理解はキャラの自律をよく説明できるものの、それぞれの可能世界までもが閉じてしまうように見える。伊藤が図像の力に執拗にこだわるのは、一見、現実世界の現実性特権を擁護する至極常識的な(しかし分の悪い)身振りにしか見えないが、ひとたび可能世界への到達可能性に着目するならば、伊藤のそれは、可能世界への到達不可能性を擁するキャラ理解への抵抗という様相を帯びているようにも見えてくる。

黒瀬陽平は、「キャラ」という用語の安易な使用を避けながら、キャラクターが自律する(つまり「キャラ」が成立する)要件について論じている(「キャラクターが、見ている。」[2008：451ff.])。黒瀬によれば、それはまず、キャラクターがフレームの機能を自身に取り込んでいくこと(フレームとしてのキャラクター)。同時に、そうして(キャラクターがフレームを決定することで)可能になる、キャラクターと観賞者との間の「逆遠近法」的な関係によって、キャラクターが作品の内部と外部を媒介するインターフェイスと化すること(インターフェイスとしてのキャラクター)。消費論(コミュニケーション分析)でなく、あくまでも表現論(コンテンツ分析)を希求する黒瀬

のそれは、図像の力にこだわる伊藤の認識を敷衍する議論として読むことができるのではないか。

現に、國分功一郎などは三浦の可能世界論を参照しながらも、ルイス型の可能世界論はクリプキ型のそれに回収されてしまうだろうと述べている。

國分 …到達可能性のもとで可能世界について考えると、出来事がある、そこで可能世界が分岐するとしか考えられない。つまり可能世界はあとからさかのぼってのみ見出されるとしか考えられない。すると、クリプキ型の可能世界論を採用せざるを得ないはずだ。

(東／國分／千葉雅也「討議 東浩紀の11年間と哲学」[2010：216])

同じ席上で、東はこう応じている。

東 …クリプキ的な可能世界がルイス的な可能世界に見えてしまうというのは、物語が必然的に持つ効果だと思います。…僕たちは事後的に可能世界を発見するわけですが、事後性そのものを物語として語ることはできない。語るときにそれは実体として語らざるをえない。

(東／國分／千葉「討議 東浩紀の11年間と哲学」[2010：218])

ルイス的な可能世界の存在は物語の効果である。次いで、可能世界・内・存在としてのキャラクターの固有性もまた物語の効果だと述べる。

東 …物語の中で登場人物は、その物語に換言されない固有名 X を持っている。そんなものは作家にはつくりえない。それは実際には、物語が消費される場から遡行して生み出される効果なのです。経験的なネットワークがむしろ超越論性を生み出す。…経験的な超越論性を発生させる経験的なネットワークが外側にあり、それがあある境界のなかに練り込まれ、もしくはある境界を画定させた中でその効果を処理しようとする、超越論性という錯覚が事後的に生まれてくる。その一例がキャラクターの固有性なの

です。

(東／國分／千葉「討議 東浩紀の11年間と哲学」[2010:220])

つまり、物語の効果によって、クリプキ的な可能世界がルイス的な可能世界に書き換えられ、同じメカニズムによって、可能世界・内・存在としてのキャラクターの固有性も上書きされるのだ、というわけだが、とすると、可能世界や可能世界・内・存在としてのキャラクターの様態は幾度となく反転し、私たちはそれらを見間違え続けるのだろうか。

泉信行が、キャラとキャラクターは「卵と鶏の関係にある」と言い、「前キャラクター」でもあり「後キャラクター」でもあるのが「キャラ」なのだ」と述べている（「キャラたち／キャラクターたち」[2008:68]）。つまり、キャラの集積がキャラクターであり、同時に、キャラクターの残像がキャラである、というわけである。可能世界の定位問題と同様、これらも、事態の事後性に注目するか、効果を実体視するか、という、どこまでも視差の問題なのである。

4. 人間の鏡像としてのかぐや姫

クリプキがそうして見せたように、固有性を考える上で、可能世界を想像することは依然、有用だ。「[キャラ＝同一性]という定義を発見した」と言う斎藤は、その著書の中で「人間性（＝固有性）＝単独性＋同一性」という仮説を提示している。

あらゆる「固有名」が要請する要素が少なくとも二つある。一つは「単独性」、もう一つが「同一性」だ。…「固有名」から「単独性」を差し引いたものが「同一性」なのではないか。重要なことは、「人間」－「単独性」＝「同一性」（＝「キャラ」）という等式の成立可能性についてである。

(斎藤『キャラクター精神分析』[2011:249-250])

私はこの斎藤仮説に修正を加えたい。現実的な交換不可能性のみならず論

理的な交換不可能性をも視野に入れた永井均の見立てに依拠するならば、(論理的な交換不可能性を意味する場合の)単独性は(現実的な交換不可能性を意味する)固有性の枠外にある剰余であり、現実的な交換不可能性と現実的な交換可能性のセットとしての同一性こそが実は固有性なのではないか。

斎藤仮説： 固有性 (= 人間性) = [単独性 + 同一性]

修正案： 人間性 = [単独性 + (固有性 = 同一性)]

永井による(山括弧と鉤括弧を使い分けたり、それぞれの概念群に「独在性」や「単独性」といったリネームを施すなどした)一連の単独性論を加味したとき、つまり、論理的な交換不可能性をも視野に入れたならば、上記修正案の大括弧内はさらに次のように展開することができるのではないか。

単独性 = 論理的交換不可能性

(同一性 = 論理的交換可能性) = {(固有性 = 現実的交換不可能性 = キャラクター) + (特殊性 = 現実的交換可能性 = キャラ)}

単独性はいつも固有性と取り違えられる。固有性と特殊性も容易に取り違えられる。逆に言えば、特殊性の上に固有性が事後的に見出され、さらにまたその(特殊性と固有性のセットの)上に単独性が事後的に見出されるのが人間という代物(阿部年春流に言うところ「人間が人間である」という事態)なのだろう。キャラとキャラクターの区別が、より具体的には、人間味あふれるキャラクターとしてのかぐや姫と(単なる絵でしかないような)いわば反キャラクターとしてのかぐや姫の反転模様が、事の推移をスローモーションで見せてくれるのである。

後年、東がキャラとキャラクターを区別した伊藤の問題意識を問うている。

東 …伊藤さんの論文は、キャラクターから区別されるキャラの表現に近代的主体から逃れる

クィアな主体の可能性を読み込もうとしていて、しかもそのクィアな主体こそがいまの日本のグローバル化を生み出しているんだ、という論理構成になっている。そこからはけっこう興味深い日本社会論も出てくる気がするんだけど…。

伊藤 …僕がやろうとしているのは、キャラをベースに近代的主体をクィア的主体に読み換えることだという〔原文ママ〕非常にクリアに要約してくれたけど、実は大塚〔英志〕さんもキャラの魅力というのを確実に捉えていて「記号的身体」のような言い方でギリギリのところまで迫っているんだよね。でも、なぜかそこでスッと引き返して戦後民主主義的主体のほうに戻っちゃうというのがある。

東 それはマンガ理論の問題というよりは、社会の変容全般に対する怯えじゃないかと思う…。

伊藤 …これは非情に印象批評的になるけれども、大塚さんは強い父にならなければいけない、そういうロールモデルをこなさなければいけないと思っている自分と、でも女々しくかわいいボクでいたいという自分に引き裂かれている感じがあります。僕としては、女々しいボクでいてもいいんじゃないの？と言いたいですね。それこそ社会も変わってきてるので、単に強い父になることだけが成熟のありようではないだろうと。

(東／伊藤「マンガの／と批評はどうあるべきか？」〔2008：139-140〕)

拙稿は当該概念の記述に伴うパフォーマティヴな（あるいはポリティカルな）効果を論ずるものではないが、（伊藤の議論や高畑の作品だけでなく）拙稿もまた、そのような深読みを読者に禁じることはできないだろう。

文献表

東浩紀／伊藤剛

2008「マンガの／と批評はどうあるべきか？」『ユリイカ』2008年6月号

東浩紀／伊藤剛／夏目房之介

2007「キャラ／キャラクター概念の可能性」『コンテンツの思想』青土社

東浩紀／國分功一郎／千葉雅也

2010「討議 東浩紀の11年間と哲学」『新潮』2010年7月号

泉信行

2008「キャラたち／キャラクターたち 『3月のライオン』——零たちと読者たちの視点」『ユリイカ』2008年6月号

伊藤剛

2005『テツカ・イズ・デッド ひらかれたマンガ表現論へ』NTT 出版

岩下朋世

2013『少女マンガの表現機構』NTT 出版

黒瀬陽平

2008「キャラクターが、見ている。アニメ表現論序説」東浩紀／北田暁大編『思想地図 vol.1 特集・日本』NHK ブックス別巻

斎藤環

2001『若者のすべて ひきこもり系 vs じぶん探し系』PHP エディターズ・グループ

2011『キャラクター精神分析 マンガ・文学・日本人』筑摩書房

塚田優

2014「キャラクターを、見ている。」『美術手帖』2014年10月号

土屋誠一

2016「すぐわかる！キャラクター論の展開」『美術手帖』2016年8月号

三浦俊彦

1995『虚構世界の存在論』勁草書房

1997『可能世界の哲学 「存在」と「自己」を考える』NHK ブックス